

祭 文

従一位 大勲位 菊花章 頸飾、第九十代、九十六代 九十七代
九十八代内閣総理大臣、第二十二代、二十五代自由民主党総裁、
そして、わが一般社団法人板垣退助先生顕彰会・贈名誉総裁で
あらせられます 安倍晋三先生の神霊に、謹んで申し上げます。

先生が身罷られまして、初めての桜の季節を迎えました。

先生は、日本の首相として、日本史上歴代最長の通算八年八ヶ月に
わたり国政を執られ、その間、東日本大震災からの復興、日本経済
の再生、日米関係を重視した戦略的外交を主導し積極的に国際平和
の秩序構築に貢献されました。

なかでも、集団的自衛権の行使容認による日米同盟強化を基軸とし
た外交・安全保障政策と憲法九条を中心とする憲法改正に、意欲的
に取り組まれたお姿は、まさに我々国民の希望の光でありました。

「歴代最長」と云う言葉を、客観的な尺度で申し上げますと、国民
から最も長く愛された首相と言えるのではないのでしょうか。

我^{われ}ら板垣退助先生顕彰会は、明治維新百年・板垣退助五十回忌に該^が当^{とう}する昭和四十三年、当時、自由民主党総裁であらせられました、安倍先生のおおおじ様にあたられます佐藤栄作先生が名誉総裁となられ「板垣退助先生^{こうきよ}薨去五十年墓前祭」を、東京品川で齋行^{さいこう}しようではないかと奮起^{ふんき}せられ、この「板垣退助先生顕彰会」を組織されました。

板垣退助の創設した「愛國公党」ならびに「自由党」が、現在の自由民主党の起源であり、畏^{かしこ}くも明治聖帝陛下の『戊辰の皇誓』の第一條「広く會議を興^{おこ}し、万機公論に決^{けつ}すべし」の文言ならびに『億兆安撫^{おくちようあんぶ}國威宣揚^{こくいせんよう}の御宸翰』の意を体して練り広げられた自由民権運動の結果、開設されたのが大日本帝國議會であるという意義を顕彰し、時の佐藤栄作総理は「板垣先生は草莽の勤皇の志士にして、戊辰に皇軍を率いて闘い、維新回天の業を成し遂げ、日本を近代国家たらしめんと、東アジア初の議會政治を創る魁^{くわい}となられた。その大先輩・板垣先生の政治的後継者が現在の自由民主党である」との矜持^{きやうじ}を胸に、自ら筆を執られ板垣精神を表す言葉として「板垣死すとも自由は死せず」と揮毫^{きごう}され、これを高知から取

り寄せた磐いわに刻ききみ、その精神まっだいが未代ほろまで滅きびぬことを祈念きねんされて、東京品川の板垣退助の墓前に石碑として建立されました。

それから五十年を経た平成三十年は、明治維新百五十年・板垣退助百回忌を迎える年となる為ため、わが一般社団法人板垣退助先生顕彰会は、高知板垣会、岐阜板垣会とも連携して議案を重ね、百回忌の記念として、高知と東京の両菩提寺に、板垣退助の位牌を新調・奉納することを決議しました。

位牌はいたづらに華美で豪奢なものを求めるのではなく「歴史的に価値のあるもの」を作ろうと思案し、位牌の裏に不屈の板垣精神を代表する文言「板垣死すとも…」の言葉を彫ろうではないかと。

そしてこの文字を五十年前の例ためしに倣い、時の自民党総裁に揮毫して頂けないだろうか。∴そのような気宇壮大な夢のような話から初まりましたが、同年二月十五日、東京の第一議員会館に、趣旨を記した書簡しよかんを持参してお願いうかがに伺い、第一秘書の初村滝一郎氏はつむらたきいちろうを通じてお話しをさせて頂いただきましたところ処、

平成三十年、当時、自民党の総裁であられました安倍晋三先生は、この趣旨しゆしに大いに御賛同なまわを賜り「板垣退助大先生のために出来ることなら…」と側近おつしやの方に仰られ、アメリカ外遊と中東外遊の狭間の多忙な時期にも関わりませず、その合い間あまを縫ぬって「板垣死すとも自由は死せず」と何枚か揮毫きこうをされ、また帰国されてから再度何枚か揮毫きこうされ、側近の方々と相談されて、お選びになった一枚を、自由民主党衆議院議員・長尾敬たかし先生に託し、不肖私ふしょうに御恵ごけいよ与よくださいました。

私わたくしがその総理のお人柄かいまみを垣間見ることのできる、優しい墨蹟ぼくせきと対面することが叶かなったのは、平成三十年五月十八日午後九時四十五分のことでした。長尾敬たかし先生が「物が物ものだけに…」と、東京から直接、新幹線に乗って持参じようふくされ、条幅じょうぷくにしたためられクルクルと巻かれた状態の揮毫きこうを拝受はいじゆいたしましたのは、大阪心斎橋の日航ホテルの二階ロビーでのことでありました。

「安倍先生は、この揮毫きこうをするにあたり、少々文字もじを練習して下さったそうですよ」との旨むねを長尾先生からお伺うかがいし、私はどれほど嬉うれしく、頼たのもしく、板垣百回忌さいこうを齋行さいこうする励はげみとなったか計はかりしれま

せん。

ところが、その板垣百回忌から、四年を経た令和四年七月八日、安倍先生が参議院選挙の応援演説の最中に、背後からテロリストに狙撃され、暗殺されるという悲劇的な事件が起きてしまいました。

民意を問うための選挙の演説を遮るかのように起きた暴挙。それは板垣退助の岐阜遭難事件から実に百四十年目の出来事でした。

我々は明治以降、幾多の先人たちの不断の努力によって培われた議会政治の根幹を揺るがすこの暴力的行為を決して許すことは出来ません。

安倍先生の最期の言葉は、『出来ない理由を探すのではなく、出来る方法を考える』という詞でした。

∴その言乃葉を総て言い終わらぬ時、背後からテロリストに銃撃され、先生は身罷られたのであります。

その言葉の意味するところは「出来ない理由」を並べて言い訳をするのではなく、「出来る方法」を考え実現させて行こうではないかと

云う、極めて「前向き」な、「建設的」な、来たるべき日本をより良くして行こうではないかと云う、熱意溢れる姿勢を表した演説でもありました。

…ところが、その先生の言葉は一発の銃声によつて、永遠に遮られてしまったのであります。

我々は言論を暴力によつて遮るような社会であつてはならないと考えております。しかし、今日本を取り巻く国際社会は暴力の渦巻く混沌の中にあります。現在のウクライナの惨劇。これは遠い異国の出来事では無く、海を隔てた日本の隣国が核の脅威を高に仕掛けた侵略戦争であります。そして、我が国もその戦争にいつ巻き込まれるか分からない国難の局面にあります。安倍先生の目指された争いのない平和な「美しい国」日本を構築する「夢」が、先生の「志」が、こんな暴力によつて途絶えることがあつてはならないと云う義憤と決意を胸に、八十日はあれど先生の愛された、桜の咲く季節を選び定めて、志を同じくする仲間たちが集い侍り、本日ここに先生の御遺徳を偲ふ次第であります。

政治家として国に殉じられました安倍先生の神霊が、天翔けまして
も、我々どこの国のゆく末をみそなわし、また「万世一系の皇統を戴
くこの皇国が諍い無く安寧を保ち、富み榮え、天壤とともに極ま
りなく続きますよう」御守り下さいますよう、護國の大神たちが
神鎮まり坐す御社に於きまして乞い願ぎ奉り私の祭文と致します。

令和五年三月二十六日 一般社団法人板垣退助先生顕彰会

理事長 高岡功太郎